

一乗谷朝倉氏遺跡出土の鉛地金について

川崎 雄一郎

1. はじめに

一乗谷朝倉氏遺跡(福井県福井市)は、戦国大名越前朝倉氏の城下町の跡である。昭和42年(1967)以降、発掘調査が進められており、当主家の館である朝倉館跡を中心に、武家屋敷、寺院、町屋群などが配置された城下町の様子が明らかになっている。

一乗谷朝倉氏遺跡から出土した資料に、鉄砲関連の遺物とともに一括埋納されていた鉛地金がある。この資料は、昭和50年(1975)に実施された第17次調査の際、隣接地で行われた立会調査で発見されたものである(福井県教育委員会・朝倉氏遺跡調査研究所1976、以下17次概報)。埋納遺構からは、火縄挟2点、弾金1点、台締め輪金具1点、容器に入った弾丸が247点、鉛地金57本が出土している(福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館2022)⁽¹⁾。また、17次概報によると白磁の皿3点も出土したとされる。この資料が発見された屋敷地について、概報では銃弾の製作や、簡単な部品の交換等をする場所であったと推定している。この他に、鉄砲を商う商人の屋敷とする説や(福川1990)、朝倉氏に優遇されていた職人頭の家と推定する説もある(福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館2009)。

近年、第36次と第42次調査でも、形態の異なる鉛地金が出土していたことが明らかになり(福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館2024、川崎2024)、城下町に少なくとも3種類の鉛地金が存在していたことが判明した。

国内で出土した戦国時代の鉛製品について、同位体比分析を実施した平尾良光は、日本産の鉛に加え、タイ産、朝鮮半島産、中国華南産の鉛が使用されていたことを指摘し、外国産の鉛や火薬が戦国時代における戦争の基盤を支えていたと評価している(平尾2014)。

本稿では、これまで一乗谷朝倉氏遺跡から出土した鉛地金について、その評価を再考する。



図1 鉛地金出土位置図(S=1/25,000)

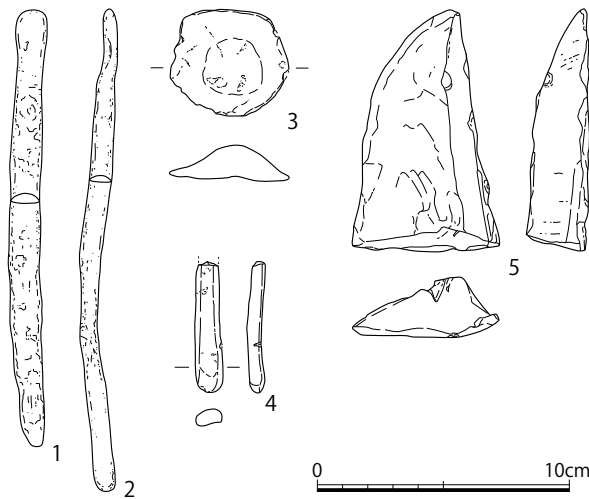


図2 一乗谷朝倉氏遺跡出土鉛地金 (S = 1/3)

とおり、鉄砲の部品や弾丸などと共に一括埋納されていたものである。出土地点は第17・44次調査で検出された屋敷地内であり、検出時の標高から上層遺構に対応するものと推定されている(福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館2001)。17次概報によると、個々の長さが11.7～18cm、幅1～2cm、重量27.8～213gの鉛地金57本が束ねられた状態で検出されたとされる。総重量3760gでおおよそ1貫目である。地金は棒状を呈し、横断面形態は半円形である。同様の形態を有する鉛地金について、半円柱形鉛インゴットの名称が提唱されている(北野2017)。一括出土した鉛地金と弾丸の一部には、同位体比分析が実施されており、鉛地金は国内産、弾丸は海外産と推定されている(馬淵1985)。

3・4は第36次調査出土の鉛地金である。3は円錐形、4は半円柱形を呈する。3は最上層で検出した屋敷地の整地土に含まれていたことから、城下町滅亡時より一段階古い時期の遺物と考えられる。円錐の径は4.2～4.7cmであり、厚さは1.4cmである。重量は95.78gである。国内で出土した円錐形を呈する鉛地金は同位体比分析の結果、いずれもタイ産であることが判明している(平尾2014)。3は全体的に扁平であるが、円錐形という形態的特徴の一致からタイ産と推定する。4は道路上に堆積した焼土層から出土しており、近辺から鉛片や弾丸も出土している。長さ6.2cm、幅1.1cm、厚さ0.7cm、重量17.64gである。出土位置は鉄砲関連遺物が一括出土した屋敷地の東に隣接する町屋、及びその町屋前の道路面である。遺構に伴う出土ではなく、出土地点の町屋との関係は不明確である。端部に折り取られたような痕跡があり、部分的に使用した鉛地金の残部とみられる。

5は第42次調査出土の鉛地金の破片である。長さ9.6cm、幅5.8cm、厚さ2.4cm、重量464gである。この鉛地金は床土直下から出土したものであり、正確な帰属時期は不明である。ただし、第42次調査の最上位遺構面は天正元年(1573)の朝倉氏滅亡時と推定しており、その後の再建は確認出来ない。そのため、この鉛地金も朝倉氏の時代の遺物と考えられる。形態の類似する鉛地金が駿府城跡(静岡県静岡市)から出土しており、この資料も本来は平面楕円形を呈する鉛地金であり、分割された一部分とみられる(静岡市教育委員会1998)。駿府城跡の鉛地金は同位体比分析の結果、中国華南産と推定されており(西田・上野・平尾2021)、第42次調査出土の鉛地金も形態的特徴から中

2. 一乗谷朝倉氏遺跡出土の鉛地金

一乗谷朝倉氏遺跡では、第17・44次、第36次、第42次調査で鉛地金が出土している(図1・2)。調査区はすべて隣接しており、字赤淵・奥間野・吉野本に位置する。この地区の調査では、城下町最大規模の道路跡と道路沿いの町屋群、山手側に立地する寺院や屋敷地の跡が検出されている。

図2の1・2は第17次調査の際に行われた立会調査で出土した鉛地金である。上記の

国華南産の可能性がある。

これまで一乗谷朝倉氏遺跡における鉛を素材に含む製品は弾丸⁽²⁾のほか、指輪、繭形分銅がある（福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 2014、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2015）。しかし指輪、繭形分銅の出土数はわずかであることから、城下町で恒常的に生産されたものとは考えにくい。また、鉛を原材料に含むガラス製品の工房も検出されているが（福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 2018）、直線で約 800m 離れた川の対岸で出土した鉛地金との関係性を積極的に評価することは難しい。そこで、消去法にはなるが、これらの鉛地金は主に弾丸の素材であったと考える。第 36 次調査では、成形不良の失敗品とも考えられる半球状の弾丸が出土しているほか、溶解した鉛の小片も出土しており、これらは弾丸を生産した痕跡の可能性はある。

3. 鉛地金の流通と管理

戦国時代における鉛地金の流通ルートについて、出土事例をもとに円錐形は東シナ海から五島列島周辺・長崎を経て太平洋航路で本州へ至るルート、半円柱形は朝鮮半島から日本海沿岸を経て流通するルートが想定されている（北野 2017）。想定された流通ルートから、東国の大名は反織田信長勢力である朝倉氏や一向宗門徒が支配する越前を介して朝鮮半島産の鉛を輸入していた可能性が指摘されている（藤田 2022）。また、鉛を含む鉄砲関連の物資の取り扱いについて、吉川氏や小早川氏の事例をもとに、当主に近い奉行人が各城の物資を詳細に把握し、鉄砲・玉・火薬を調達・補給する態勢が成立していたことが明らかになっており、火薬・玉は加工済みのものと原料の状態のものが補給されていたとされる（藤井 2023）。

朝倉氏は、領国内に日本海側の貿易港として敦賀と三国を有している。また、朝倉氏は、東北の下国愛季に対し「国友丸筒」を贈っており（福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 2004）、敦賀に隣接する近江からの流通も確保していた。近江は琵琶湖を介して畿内と繋がることから、太平洋側から畿内へと運び込まれる物資にもアクセスできたものと考えられる。朝倉氏が他の勢力の鉛の入手にまで関与していたかどうかの確認は得られないが、国内外からもたらされる鉛地金の流通に関して、地理的に優位な立場にあったことは確かであろう⁽³⁾。一乗谷朝倉氏遺跡出土の鉛地金に複数の形態がみられる現象は、朝倉氏が多様な流通ルートを確保していたことを示すものと考えられる。

現在、朝倉氏関連の史料で鉛に関するものは見つかっていない。しかし、元亀 3 年（1572）、朝倉氏の家臣である山崎吉家が美濃安養寺に送った書状には、「殊塩硝三斤被懸御意候」とあり（福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 2004）、安養寺から送られた塩硝を、朝倉義景が特に気にかけている様子が記されている。これは、当時の朝倉軍における鉄砲関連物資の需要の高さを示す史料である。

このように、軍事上の重要物資である鉛や火薬が城下町において自由に取引できるものとは考えられない。吉川氏や小早川氏の事例のように、鉛や弾丸、火薬は朝倉氏や一乗谷の奉行人（水藤 1981）の管理下に置かれ、弾丸の生産や鉄砲の使用といった必要に応じて支給されたものと推定する。支給された鉛や弾丸、火薬は最終的に個々の射手の手元に分配されたのであろう。

ここで改めて、出土した鉛地金の評価について見直しを行う。まず、一括埋納された鉛地金の特徴として、1貫目というきりの良い重量で束ねられていたこと、弾丸と地金で原料の産地が異なること、鉄砲の部品が共伴することが挙げられる。しかし、これらの特徴に弾丸の生産と直接結びつく要素は薄い。つまり、これまで想定してきた生産に携わる商人・職人像とは一旦距離を置いて考えるべき資料といえよう。むしろ、「朝倉氏が別々に入手し、管理していた弾丸と鉛地金を必要に応じて屋敷の住人に支給した」と考えると、きりの良い重量であったことや、弾丸と地金の同位体比分析の結果が異なったことについても違和感はない⁽⁴⁾。支給された弾丸・鉛地金と替えの部品等をまとめたものが、使用されることなく埋納されたのであろう。埋納の理由は不明だが、屋敷の住人の評価を生産者に限定することなく、使用を含めた朝倉氏による鉄砲運用に携わる人物像を想定すべきである。

一方、他の鉛地金は、少量ずつの出土に限られる。一括埋納の事例のように全部が使用されないままに残る事例は珍しく⁽⁵⁾、これらは、個々の射手の手元に渡った鉛地金の一部と推定する。

戦国大名毛利氏の鉄砲衆について、諸城を守る番将の下に配属される場合が多かったとの指摘がある(秋山 1998)。これは、鉄砲が主に防御用の兵器として用いられていたことを示すものであるが、一乗谷朝倉氏遺跡にも上城戸跡や下城戸跡などの防御施設が存在するほか、周辺には複数の山城が存在する。朝倉氏の滅亡以前に一乗谷で鉄砲の使用を伴う戦闘の記録は無いが、城下町の警備にあたって鉄砲が配備され、鉛や弾丸、火薬が支給されていた可能性は十分に想定できる。遠征に持ち出す弾丸や備蓄用の弾丸生産が城下町で行われていた可能性もあるが、いずれにせよ、少量ずつ出土する鉛地金は、城下町の住人が弾丸の生産や鉄砲の使用に備え、手元で管理していたものと推定する。

4. まとめ

一乗谷朝倉氏遺跡では、外国産とみられる鉛地金が2種、国内産とみられる鉛地金が1種、合計3種類の鉛地金が持ち込まれていた。これは、朝倉氏が領国の地理的優位性を生かし、多様な流通ルートを確認していたことを示すものと考えられる⁽⁶⁾。その一方、特定の生産地から安定的に鉛を供給できていないとも解釈できる。国内における鉛の生産量について、銀の生産に利用されたことにより国内産の鉛の総生産量が足りなかったという指摘もある(平尾 2014)。

また、出土した鉛地金について、「弾丸の生産や鉄砲の使用に備えた支給品」という新たな見方を提示した。これは、朝倉氏による鉄砲関連物資の管理を想定したものであり、町屋の住人による生産という枠を超え、朝倉氏による軍事的または経済的な政策を考慮した上で評価すべきという考え方である。ただし、史料的制約から他の大名の事例を多用しており、鉄砲本体や弾丸・火薬についての分析が出来ていないなど、不明瞭な部分も多い。この点について、今後も出土資料の分析、類例の検討を進めていきたい。

註

- (1) この資料を取り上げた文献は多いが、文献ごとに数量の記載が若干異なる。本稿では、現時点で最新の文献である『福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館 Guide Book』の記述を採用した。地金という器種名については、一乗谷朝倉氏遺跡以外の報告書や論文等ではインゴットと呼称される場合があるが、記述内容から同一のものを指す用語と判断し、区別をする必要はないと考える。ただし、『広辞苑 第7版』によるとインゴットの意味に溶融した金属を型に鑄込んで固化させたものという記載がみられるのに対し、地金については金属製品に加工する前の素材とある(新村編 2018)。現時点で戦国時代に流通した全ての鉛地金の生産に型が使用されていたかどうかという検証は行われていないため、本稿においては言葉の意味を考慮し、一乗谷朝倉氏遺跡の報告書に合わせて地金の器種名を採用した。
- (2) 2024年3月までに刊行された報告書・概報、及び『福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館紀要 2023』に掲載された弾丸の報告点数は、一括埋納の事例を除き29点である。ただし、出土遺物一覧表で出土数のみを報告した資料も含む。
- (3) 半円柱形とされる鉛地金のうち同位体比分析の結果、朝鮮半島産と推定されているものは若見迫遺跡(広島県三次市)の1例のみであり(公益財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室 2014)、現時点において日本海沿岸を経由した朝鮮半島からの鉛地金の流通経路が確定的とは判断しがたい。ただし、吉川元春が日本海流通で取引される硝石などの軍事物資を目的に、毛利元就に対して日本海沿岸の国衆福屋氏の旧領を要求していたという説もあり(岸田 2019)、日本海沿岸での交易を無視することは出来ない。
- (4) 藤井俊輔が火薬や弾丸等の補給を分析する際に紹介している「桂春房・二宮春次連署書状写」には、鉛2貫目が補給されたことが記されており(藤井 2023)、おおよそ一回の補給量の目安となるであろう。一方、駿府城跡二ノ丸水路から出土した鉛地金は総重量100kgを超えることから、一括埋納された1貫目程度が戦国大名の備蓄の全てとは考えにくい。
- (5) 戦国時代における鉛地金の出土事例をみると、城山遺跡(和歌山県和歌山市)で2点(財団法人和歌山市文化体育振興事業団 1996)、根来寺坊院跡(和歌山県岩出市)で1点(財団法人和歌山県文化財センター 1989)、岡豊城跡(高知県南国市)で1点(公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター 1992)、万才町遺跡(長崎県長崎市)で2点(長崎市埋蔵文化財調査協議会 1996)など、少量の鉛地金が出土する事例が複数報告されており、鉛地金の出土のあり方としてはこちらの方が一般的と考えられる。
- (6) 複数種類の鉛地金が出土する遺跡に中世大友府内町遺跡(大分県大分市)や駿府城跡があり、いずれも交易で栄えた場所である。中世大友府内町跡では円錐形の鉛地金のほか、円形の鉛板や刻印のある鉛板状の製品が出土している(大分県教育庁埋蔵文化財センター 2013)。また、駿府城跡でも楕円形の鉛地金に加え、タイ産の円錐形の鉛地金が出土している(西田・上野・平尾 2021)。

参考文献

- 秋山伸隆 1998 『戦国大名毛利氏の研究』 吉川弘文館
- 大分県教育庁埋蔵文化財センター 2013 『豊後府内 18』 (大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書 64)
- 川崎雄一郎 2024 「第36次調査出土鉛製品について」 『一乗谷朝倉氏遺跡博物館年報・紀要 2023』 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館
- 岸田裕之 2019 「第5章 石見国衆連合と大名たちの室町戦国時代史」 『講演録で読む中国地域の戦国時代史』 清文堂出版株式会社
- 北野隆亮 2017 「根来寺遺跡出土の半円柱形鉛インゴットと鉛製鉄砲玉」 『紀伊考古学研究』 第20号 紀伊考古

学研究会

- (公財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター 1992 『岡豊城跡Ⅱ』 高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 6
- (公財) 広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室 2014 『若見迫遺跡・畑尻遺跡』 (公財) 広島県教育事業団発掘調査報告書 63
- (財) 和歌山県文化財センター 1989 『根来寺坊院跡』
- (財) 和歌山市文化体育振興事業団 1996 『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報』
- 静岡市教育委員会 1998 『駿府城跡 I (遺物編 1)』 静岡市埋蔵文化財調査報告 44
- 西田京平・上野淳也・平尾良光 2021 「附編 2 駿府城跡出土の金属製品 (駿府城二ノ丸東御殿の青銅製鯨ほか) の鉛同位体比」 『駿府城跡三ノ丸 城内中学校地点発掘調査報告書』 静岡市教育委員会
- 新村 出編 2018 『広辞苑 第 7 版』 岩波書店
- 水藤 真 1981 『朝倉義景』 日本歴史学会編集 吉川弘文館
- 長崎市埋蔵文化財調査協議会 1996 『万才町遺跡 朝日生命ビル建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 平尾良光 2014 「鉛玉が語る日本の戦国時代における東南アジア交易」 『大航海時代の日本と金属交易』 別府大学文化財研究所企画シリーズ 3 ヒトとモノと環境が語る 平尾良光・飯沼賢司・村井章介編 思文閣出版
- 福井県教育委員会・朝倉氏遺跡調査研究所 1976 『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡Ⅶー昭和 50 年度発掘調査整備事業概報ー』
- 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 2001 『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅷ 第 44 次 第 17 次調査』
- 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 2004 『朝倉氏五代の発給文書』 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館古文書調査資料 1
- 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 2009 『第 17 回企画展金工の技と美ー金属製品にみる一乗谷ー』
- 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 2014 『第 21 回企画展戦国時代の金とガラス〜きらめく一乗谷の文化と技術〜』
- 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 2018 『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告 16 第 127・130・136 次調査』
- 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館 2022 『福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館 Guide Book』
- 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館 2024 『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告 22 第 42 次調査』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2015 『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告 11 第 86・87・90・132・135・144 次調査 (西山光照寺跡)』
- 福川一徳 1990 「大玉小玉の鉄砲玉」 『実像の戦国城下町越前一乗谷』 よみがえる中世 6 小野正敏・水藤真編 平凡社
- 藤井俊輔 2023 「戦国大名毛利氏と鉄砲 吉川氏を中心に」 『史学研究 Review of historical studies』 314 号 広島史学研究会
- 藤田達生 2022 『戦国日本の軍事革命 鉄砲が一変させた戦場と統治』 中央公論新社
- 馬淵久夫 1985 「鉛同位体比測定による火縄銃関係資料の原料産地推定」 『朝倉氏遺跡資料館紀要 1985』 福井県立朝倉氏遺跡資料館

図出典

- 図 1 電子地形図 25000 (国土地理院) を加工して作成
- 図 2 1・2 (福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 2001)、3・4 (川崎雄一郎 2024)、5 (福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館 2024) を再トレース